

氏名（本籍）	門脇 早聴子（兵庫県）		
学位の種類	博士（音楽）		
学位記番号	博甲第 42 号		
学位授与年月日	平成 29 年 3 月 15 日		
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項 該当 音楽文化研究科 音楽専攻		
論文題目	日本のリズム教育におけるカスタネット類の役割		
論文審査委員	主査	教授	高松 晃子
	副査	教授	徳丸 吉彦
	副査	教授	八木 正一

### 論文内容の要旨

本研究の目的は、日本の初等教育において主に音楽科の中で活用されたカスタネット類に注目し、楽器としての変遷を追うとともに、それらが器楽教育で果たした先導的な役割を明らかにすることである。

戦後の日本で教育を受けた者にとって、カスタネット等のリズム楽器は、なじみ深い楽器であろう。カスタネットは小学校だけでなく、幼稚園や保育園の活動でも使用されているように、年齢を問わず扱いやすい楽器の一つといえる。しかし、カスタネットには様々な種類があり、学校現場でも異なる種類の楽器が用いられていたことはあまり知られていない。そこで本論文では次の 5 種類のカスタネットを取り上げ、それらの歴史と役割について考察した。①戦前から音楽教育や体操で使用された楽器「ミハルス」、②戦後に子どもでも使いやすい楽器として考案された赤・青色の「ハンドカスタ」、③オーケストラ用の「柄付きカスタネット」、④スペイン舞踊用の「スパニッシュ・カスタネット」、⑤その他のカスタネット類（日本の楽器会社が様々な工夫を凝らして編み出しながらも現在は使用されていないものを含む）。これらのカスタネット類に注目した理由は、子どもたちのリズム感の育成や器楽教育に資するために、日本人により創意工夫された楽器であることと、初等教育において全児童に持たせた初めての楽器であることである。

カスタネット類について述べる上で、重要な人物がふたりいる。それは、教育家であり舞踊家でもあった千葉躬治（みはる）（1903-1995）と、音楽科教師の上田友亀（ともき）

(1896-1994)である。彼らは、楽器の中でも簡単に演奏できるカスタネットに注目し、千葉が「ミハルス」、上田が「ハンドカスタ」という楽器を創案した。さらに彼らは、唱歌授業の中で児童が楽器を扱うことのなかった時代に、身体を動かし楽器を使ってリズムを認識させる指導法も開発した。これらは、戦後の音楽教育に大きな影響を与えたといえるだろう。

本論文は四部構成で、主な内容は次の通りである。

第1章では、日本の初等音楽教育において使用されてきた「リズム」という言葉に着目した。第二次世界大戦後、「リズム教育」「リズム感」といった用語がさかんに用いられたにもかかわらず、リズムの定義は、学習指導要領においても、楽典等の教則本や指導書においても、極めて曖昧だったからである。そこで本論文では、音楽教育者たちが「リズム」にどのような意味を持たせようとしたのかを考察するため、まず、クーパー、グローヴナー・W. (Cooper, Grosvenor W.) とマイヤー、レナード・B. (Meyer, Leonard B.) が提唱した、パルス、拍、拍子という階層的な関係と、アクセント-非アクセントのグルーピングという考え方に依拠しながら、「リズム」の概念を整理した。その上で、日本の音楽教育に影響を与えたマーセル、ジェームス・ロックハート (Mursell, James Lockhart 1893~1963) のリズム論、日本の音楽家たちが学んだダンノーゼル、アドルフ＝レオポルド・(Danhauser, Adolphe-Léopold 1835~1896) の理論、さらには音楽教育を牽引した井上武士 (1894~1974) によるリズム論を検討した。マーセルとダンノーゼルの理論には、アクセントと非アクセントによる拍でリズムが形づくられているとする点が共通していた。またダンノーゼルと井上は、リズムには必ず拍子があり、拍子が音の長短を整理しているという考えであった。しかし、クーパーとマイヤーが提唱した「グルーピング」という考えはみられず、「リズム」は「拍」や「拍子」と混同されがちであった。

第2章では、カスタネット類が輸入された明治時代から戦前までに焦点を当てた。柄付きカスタネットは明治期から、舞踊用カスタネットは、昭和初期の舞踊家による公演を契機に知られるようになり、その後輸入されるようになった。同じころ学校教育が始まり、音楽については「唱歌」の科目名で西洋音楽を中心とした教育が開始された。リズム教育が広く認知されたのは戦後のことであったが、戦前から打楽器を用いてリズム教育を試みた者があった。それが、千葉と上田であった。スパニッシュ・カスタネットと四つ竹を元に千葉によって考案されたミハルスは、簡易な子ども用の楽器ではあった。しかしそれは身体による表現活動の中で活用され、両手に一つずつ持って音楽に合わせて鳴らしながら踊る、ミハルス体操へと発展した。一方、尋常小学校訓導であった上田は、唱歌の授業においてミハルスを始めとする簡易楽器を使用することで、児童がより積極的に音楽を楽しむことができると考えた。その根本には、子どもの発達に即した創造的な音楽教育を推進した、コールマン、サティス N. (Coleman, Satis N. 1876-1961) の進歩的な考え方があった。千葉と上田が提案した指導例を見ると、彼らが、クーパーとマイヤーのいう「グルーピング」に近いリズム観をもっていたことがわかる。

第3章では、戦後に誕生したハンドカスタを取り入れたリズム教育に注目した。昭和22年、文部省が小学校学習指導要領（試案）の中に器楽教育を含めた。それを機に、音楽科と体育科の学習指導要領の中に、リズム教育や遊戯といった共通点が見られるようになる。学校で使用しやすいように、楽器の改良も行われた。その代表的な例が、上田友亀が考案したハンドカスタである。これは、ミハルス（Mihals）の2枚の板を繋げるのに弾力のあるゴム紐を用い、扱いやすくしたものである。上田によれば、教育的価値のある簡易楽器には次の3つの条件があった。①大人が使う楽器の縮図ではなく、児童の発達に応じた音楽表現を導くもの、②音楽的な才能や環境に恵まれなくとも親しみやすい楽器であること、③音楽教育の初歩段階を担うという明確な役割が付与されたもの、である。ハンドカスタの需要は大きく、多いときには年間72万個も製造された背景には、このような考えが受け入れられたことのほかに、音楽教育関係の雑誌等に出された多くの広告の成果もあったと考えられる。

第4章では、カスタネット類の全盛期とも言える昭和26年から昭和30年代に焦点を当てた。昭和26年に改訂された小学校学習指導要領（試案）には、CIE（連合国最高司令官総司令部の教育担当部局）の指導により、当時のアメリカの考え方が反映された。そこで、項目として新たに「リズム反応」が追加されたことで、音楽科、体育科ともそれまで以上にリズム教育を重視した。その結果、音楽科だけでなく体育科においてもカスタネットが使用されることになり、カスタネットの需要は増大した。また、小学校にとどまらず保育においても同様の傾向が見られた。戸倉ハルと小林つや江によるハンドカスタを使用した遊戯の試みは、幼児に対するリズム教育の例として注目に値する。昭和30年代、文部省はハンドカスタを「教育用楽器」に指定した。これは、ハンドカスタが全国に普及する足がかりとなっただけでなく、ハンドカスタからさらに発展した新種のカスタネット類を次々と誕生させるきっかけにもなった。さらにこの頃、音楽室の授業環境が整備され始めたことも、カスタネットの需要が増えた一因と考えられる。このように、いくつかの条件がそろった昭和26年から昭和30年代に、カスタネット類は全盛期を迎えたのである。

本論文では、カスタネット類が学校教育の中で果たした役割を、楽器の歴史と共に明らかにした。この楽器の急速な普及は、個人の教育に対する熱意から生まれた創意と、社会制度的な要請によって実現した。昭和初期の物資の乏しい時代に、千葉や上田といった個人の教育に対する熱意から生み出されたのが、ミハルスとハンドカスタという似通った楽器であったことは偶然かもしれない。はじめのうち、これらは個人的な使用にとどまったが、彼らの情熱はまわりの教育者たちに影響を及ぼし続けたのであろう。戦後、文部省がカスタネットに大きな役割を与えたことは、偶然が必然へと変化した結果である。安価で大量生産が可能であるという利点以上に、音楽の楽しさを実感するための手段として、その効果が大いに期待されたのがカスタネット類であった。

## 博士論文審査の要旨

### I. 論文審査の要旨

音楽文化研究科博士後期課程3年次生、門脇早穂子による博士学位論文『日本のリズム教育におけるカスタネット類の役割』（平成28年12月14日提出）の審査について報告する。

本論文は、日本の学校における音楽教育で使用されてきたカスタネット類に注目し、楽器としての変遷を追うとともに、それらがリズム教育で果たした先導的な役割を明らかにしようとするものである。赤と青の2枚の板を打ち合わせて音を出すカスタネットは日本人が考案した楽器で、その前身であるミハルスが作られた昭和8年以来、学校における音楽教育の実情に合わせて使用されてきた。本論文では、楽器の発案、製作の過程が詳細に記述されているだけでなく、学校音楽教育の制度や目的に対応しながらカスタネット類が独特の役割を担っていた様子が丹念に描き出されている。学校に導入される楽器の種類が増加し、子どもたちの音楽体験が豊富になった現在では、カスタネットはその役割を終えたと言えるかもしれない。しかし、昭和初期から第二次世界大戦直後の物資の乏しい時代に、子どもたちに少しでも音楽的な生活を体験させるために、試行錯誤して作られたカスタネット類の功績は大きかったと言えよう。以上が論文の概要である。

博士論文審査は、平成29年2月1日の公開試問後、1322教室にて行われた。評価すべき点は、主として以下の点である。まず、楽器の歴史とリズム教育の変遷についてそれぞれ十分に調査され、それらが個別に論じられるだけでなく、相互に関連付けて論を展開することに成功していることである。前者については、ミハルスの創始者のご遺族やハンドカスタ製作会社への取材やインタビュー、試作品の作成、特許の取得状況、広告の収集・分析など、多方面からの調査により極めて具体的に明らかにすることができた。後者については、解釈の分かれる「リズム」という用語について、先行研究に基づき初めに概念規定を行った。それにより、首尾一貫した記述の枠組を確保することができ、リズム教育の変遷について客観的に論じることに成功している。楽器の歴史を研究することから、そのときどきの社会背景ならびに制度、音楽教育に求められていたことが具体的に明らかになったことは、本論文の成果として高く評価できる。特に、戦後になってから目立って行われるようになった器楽教育やリズム教育には、戦後のアメリカからの影響だけではなく、日本で戦前から行われていた教育が大きな影響を与えているとの分析は、日本の器楽教育研究に新たな視点をもたらすものである。

一方、第4章の構成に若干の脆弱さが指摘された。その原因として、「カスタネットの全盛期」を示す章のタイトルと、この楽器の衰退まで扱おうとする内容との不一致があろう。衰退の要因については、他の楽器、たとえば鍵盤ハーモニカの隆盛との関係なども視野に

入れた、より詳細な検討が必要であると思われる。また、音楽科と体育科が共通してリズム教育に取り組んだ昭和 30 年代の考察、特に体育科側の実践に関する考察がやや手薄で、両者の遊離をカスタネット衰退のひとつの原因とするには説得力を欠く。しかしながら、これらの点を詳述することによりかえって焦点が定まらなくなるおそれもあることから、今回の論文では新たな問題提起と位置付けたのは妥当な判断である。

全体をとおして、着想と研究手法がきわめて独創的であり、日本の音楽教育研究に新たな視点をもたらしたことが高く評価された。当審査委員会は全員一致で、本論文が申請者に対して博士（音楽）の学位を授与するにふさわしいものであると判断した。

## II. 試問の結果の要旨

音楽文化研究科博士後期課程 3 年次生、門脇早穂子による博士学位論文公開試問の結果について報告する。公開試問は、平成 29 年 2 月 1 日、10 時 30 分より、1322 教室で行われた。論文執筆者による発表に 20 分、試問担当者による試問と傍聴者からの質問に 20 分という形をとった。

発表では、よく準備されたスライドを用いて、時間内に論文の全体像がわかりやすく提示された。楽器の実物を回覧したことも効果的であった。試問では、いずれの質問もよく理解して誠実に応じ、内容も適切であった。楽器に関する細かい点から、自らの研究の意義や位置付けまで、自在に対応することができている。

研究者にとって重要な資質である、相手に理解してもらおうとする努力と誠実な態度とが十分に備わっていることが確認できた。よって、試問担当者全員一致で合格と判断した。